スイス
from Switzerland

中東生
Shinobu Naka

スイス音楽物語
チューリヒ歌劇場の女王 エディタ・グルベローヴァの復活（2013年）

2013年6月、10年半ぶりにチューリヒ歌劇場へ

エディタ・グルベローヴァはその存在自体がすでに歴史的だ。以前インタヴューで自宅に招かれた際、次の役デビューを行うオペラとして譜読みをしていた作品名を5つ挙げてくれたが、そのあと最終的に選ばれたのはベッリーニ《異国の女》で、2013年6月、10年半ぶりにチューリヒ歌劇場に登場した。その長い不在の原因は、彼女の次女がバレリーナとして舞台に出た際、演出上の火が引火して火傷を負ったが、その際の対応が不誠実だったため、二度とチューリヒ歌劇場には出演しないと決心したからだと言われている。2012年、アレクサンダー・ペレイラからアンドレアス・ホモキに総裁が交代した直後のドニゼッティ《ロベルト・デヴュリュー》再演で、ようやくチューリヒ歌劇場への復帰をはたした。娘と孫娘がエキストラとして同じ舞台に立ち、「チューリヒ歌劇場の女王」帰還を、観客と劇場関係者が一体となって満喫した翌年、待ちに待った新演出のベッリーニ《異国の女》が発表され、スイス内外の期待は最高潮に達した。

前述のインタヴュー時に挙げたオペラ群について「でも、興味を引かれる部分以外が退屈に思えるので、記事には『?』マークを3つくらいつけておいてね」と笑っていたが、この《異国の女》も、初めて聴いたときには居眠りしてしまったという。しかし、彼女の深く読み込んだ音楽作りと完璧なテクニックに、クリストフ・ロイの演出が光り、上演機会が極端に少ないこのオペラは生き生きと再生したのである。

《ロベルト・デヴュリュー》のアデーレで最後の役デビューをしたときのグルベローヴァ ©Monika Rittershaus

精緻な高音とコロラトゥーラに劇的な低音を共存

グルベローヴァ演じる異国の女、アライデは湖畔で隠遁生活を送っているが、その地の領主の娘イゾレッタの婚約者、アルトゥーロ伯爵はアライデに恋心を抱く。友人ヴァルデブルゴ男爵に判断を委ねるために会わせると、その異国の女はヴァルデブルゴ男爵の妹だったのだ。二人は幼なじみだと偽り、ヴァルデブルゴ男爵はアライデを諦めるようアルトゥーロに助言する。しかし、二人の親密さに疑いを抱いたアルトゥーロは、ヴァルデブルゴ男爵に剣を向け、湖に落としてしまう。そこへ、アライデがやって来て、ヴァルデブルゴ男爵は兄だと打ち明けるので、アルトゥーロは男爵を救うため湖に飛び込む。その間、血に染まったアルトゥーロの剣を持って独りその場に残されたアライデは、男爵殺しの容疑をかけられ逮捕される。身分を明かせないアライデは法廷で申し開きできずにいると、アルトゥーロと、死んだはずのヴァルデブルゴ男爵が現れ、経緯を話す。アライデは、前妻との争いに巻き込まれていたフランス王の妃アニェーゼだったと知ったアルトゥーロは、失意のすえ自殺するという筋だが、グルベローヴァの歌唱が貴重すぎて、どんなストーリーも頭に入って来ない。

「2007年ころに、偶然ある人が見せてくれた新しいテクニックを最近取り入れている」と、インタヴュー時にその秘密を明かしてくれたグルベローヴァだが、その影響か、低音で開いたポジションを使うため、太い声を得ると同時に張り詰めた緊張感も解放させるのだ。こうして、精緻な高音とコロラトゥーラ

スイス NOW
新型コロナウイルス 関連情報

主要3団体の動向

「6月6日から300人までのイヴェントを解禁する」と連邦政府が5月27日に発表したため、各団体は急いで今シーズン閉幕へ向けてのプログラムを決定した。その前日の6月5日、チューリヒ・フェスティヴァルが始まる予定であったが、今年はフェスティバルXと称して、オンラインで開催された。

スイス・ロマンド管弦楽団は5月30日（藤村実穂子をソリストに迎えたマーラー「交響曲第3番」）と6月4日（マレク・ヤノフスキが指揮したブルックナー「交響曲第4番《ロマンティック》」）にYouTube用の公演を配信したあと、6月6日にジョナサン・ノット芸術監督が指揮するオール・モーツァルトでようやくライヴ公演を再開した。ネルソン・ゲルナーをソリストに迎えた「ピアノ協奏曲第23番」と、「交響曲第41番《ジュピター》」というプログラムで、16、18日の3公演が即完売であった。その後もYouTubeでストラヴィンスキー《春の祭典》やライヴ公演の予定だったベートーヴェン「交響曲第9番《合唱》」を、ソーニャ・ヨンチェヴァ等の豪華キャストで配信しながら、シーズン閉幕へと向かった。

チューリヒ・トーンハレ管弦楽団では6月12日、プレス関係者や特別ゲストなどを前に演奏した後、6月19、20日からは一般売り出しでシベリウス「組曲《恋する人》」＋ドヴォルジャーク「弦楽セレナード」、またはR.シュトラウス「13管楽器のためのセレナード」＋ドヴォルジャーク「管楽セレナード」を、1日に複数回演奏した。コンサートマスターのユリア・ベッカーは、3カ月ぶりにオーケストラの響きのなかに身を置ける感動で涙を浮かべるなど、感慨深く情熱的な演奏だった。6月25、26日はデュカス「舞踏劇《ラ・ペリ》」から「ファンファーレ」＋ストラヴィンスキーの協奏曲《ダンバートン・オークス》＋R.シュトラウス《町人貴族》の組み合わせと、ルトスワフスキ《葬送音楽》＋オネゲル「交響曲第2番」で、精力的に今シーズンを終えた。「楽団員同士も2メートルの間隔をおき、観客数240名で上演することは経済的には大打撃だが、聴衆に忘れられないよう、また、ライヴで演奏できる喜びを楽団員に再び与えたいと思い、決行した」のだという。公演の様子は、フェスティバルXのホームページで一部、そしてコロナ禍に新しく提携したパートナーのIDAGIOでは7月まで聴くことができる。

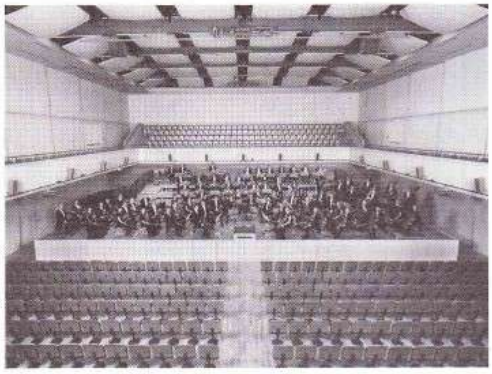
チューリヒ歌劇場は7月4日から1週間、「フィナーレ」音楽祭と称して毎日豪華な公演が堪能できることになった。音楽総監督のファビオ・ルイージが縮小したオーケストラで7月4、5日にR.シュトラウス《メタモルフォーゼン》とシェーンベルク《浄められた夜》を聴かせたあと、6日はサビーネ・ドゥヴィエルとベンジャミン・ベルンハイム、7日はトーマス・ハンプソン（ピアノ：ヴォルフラム・リーガー）、8日はディアナ・ダムラウ（ハープ：クサヴィエ・ドゥ・メストレ）、9日はフィルハーモニア・チューリヒ内の古楽アンサンブル、ラ・シンティッラ（指揮：リッカルド・ミナージ）とソプラノのジュリー・フックス、10日はハビエル・カマレナ（T）、最後はチューリヒ・フェスティヴァル内に予定されていたピョートル・ベチャワ（T）＆カミッラ・ニールンド（S）のオペレッタ・ガラでシーズンを締め括る。次号で可能な限りレポートしたい。

義務教育機関に続き、6月8日から高等教育機関も分散授業を再開したが、新型コロナは遠い過去の出来事だったかのように、ナイトクラブや湖水浴、デモなどで人々が密集しているのを見ると心配になる。6月15日から近隣国との国境も開く直前、エディタ・グルベローヴァに近況うかがいの電話をしてみた。新型コロナに感染することもなく無事で、現在は予定を決めずに流れに任せて日々を過ごしており、事態が収束したらスロヴァキアのブラティスラヴァで歌う予定だという。

に、落ち着いて劇的な低音を共存させた。筆者の個人的見解では、その発声法を取り入れたことで、最後に成熟した、そして劇的な役柄にマッチするドラマティックな声音を得たが、彼女がもともと持っていた高音の容易さと、統一された声音のバランスが危うくなった原因にもなったと見える。しかし、別のインタヴューで、「聴衆はまだ気づいていなかった『なにか』に気づいたため、発声法のスペシャリストを探した」と語っているので、必然的だったのだろう。

すべてから一定距離を保ったミステリアスなアライデが、スロヴァキアから亡命して以来、人生の大半を「異国の女」として過ごしてきたグルベローヴァとだぶり、彼女の人生の集大成のようにはまりすぎていて、「これが彼女の最後の役デビューになるのではないか」という直感がよぎった。慌てて打ち消したカンは残念ながら当たってしまったようだが、2018年のキャリア50周年記念リサイタルでも、すばらしい芸術が堪能できた。緊張と旅の連続だったという彼女の人生から一歩引いた現在の生活を楽しみながら、リーダーアーベントだけでもできるだけ長く続けてほしい。そして、彼女の到達点を記憶に刻み込みたい。

スイス・ロマンド管弦楽団 ©OSR / Eric Marin


チューリヒ・トーンハレ管弦楽団 ©Paolo Dutto